



高瀬商店街の町並み

町並みについて

- ◆ 玉名市高瀬地区は、古代より港があったと推定され、早くから海外渡航や貿易拠点として重視されていた港町で、16世紀の明の歴史書にも記載されています。
- ◆ 江戸期には、細川藩の五ヶ町(熊本、八代、川尻、高瀬、高橋)の一つに数えられ、藩営の米集積所の高瀬御蔵や藩主の休憩施設の御茶屋が設置されていました。
- ◆ 町中を流れる高瀬裏川筋には石垣が築かれ港の機能を担い、表通りは商人の町として賑わいました。また、同地区には繁根木八幡宮や大覚寺など多数の寺社や、高瀬七天神と称される天神などがあり、江戸期の町割りがほぼそのままの形で残されています。



町並みの中心(核)となる伝統的建造物



高瀬船着場跡

玉名市史跡

- ◆ 1588年に加藤清正が菊池川の米集積所として改修に着手し、細川藩政期に港の規模を拡充しました。国内でも特に品質の良さを認められていた肥後米の大坂堂島へ向けた出荷は、同船着場からのものが半数以上を占めていました。
- ◆ 同地区の賑わいを象徴するような施設群は西南戦争により焼失してしまいましたが、船に米を積み込むための「俵ころがし」と呼ばれる石畳みの坂が2基残っており、往時の繁栄ぶりを垣間見ることができます。



高瀬船着場跡の「俵ころがし」

高瀬地区は古くから港町として発展し、江戸期には藩の拠点として重視されました。1800年代初期になると次第に菊池川の河口の底が隆起し船の横付けが難しくなったことから、川下の大浜町(玉名市)に水運機能が移りましたが、商業の町としての機能は維持されました。また西南戦争の戦禍を被りましたが、現在でも古くからの店や石垣などが残る貴重な町並みです。